千葉県夷隅地域における南方系屋敷林の原型とその変容実態

－明治期銅版画と現状との比較分析に基づいて－

THE PROTOTYPE AND ITS TRANSFORMATION OF THE SOUTHERN PLANTING SYSTEMS OF PREMISES FOREST IN ISUMI AREA OF CHIBA PREFECTURE

－ Based on the comparative analysis of present states and the copperplate engravings of the Meiji era －

不破 正仁*, 藤川 昌樹**

Masahito FUWA and Masaki FUJIKAWA

This paper examines the prototype and its transformation of southern planting system of premises forest based on the field survey of the farmhouses in Isumi Area that were depicted in the Meiji Era. The prototype was composed of 1) hedges called "maki-bei" surrounding the premises, 2) evergreen broad-leaved trees and pine trees which form background trees and a big tree with a small shrine, and 3) planted space for viewing with Cycad and cultivated space around buildings. Also it has turned out that although these patterns still remain basically, several patterns have transformed differently in response to the change of land use.

Keywords : Hedge, Background trees, Cycad, Planted space for viewing, Nihon-hakuran-zu, Maki-bei

生垣, 屋敷背後林, ソテツ, 鑑賞空間, 日本博覧図, マキベイ

1. はじめに

屋敷林は、そのほとんどが人為的に形成されてきたものであり、生活・生業に即した工夫の積み重ねによって樹木選択が行われ、定型的な配置がとられている。筆者らは、これまで屋敷内の敷地利用に対応した定型的な樹木配置を屋敷林の樹木構成パターンと定義し、明治期の銅版画を主史料として当該期に広く確認される8パターンを抽出し、その関東地方における分布を検討してきた。この結果、パターンの組み合わせに着目すると植生豊かな関東地方の屋敷林には、明治期において北方系・南方系と称すべき2つの系統の存在とその両者が混合するような地域もみられることが判明した^{注1)}。

本稿で取り上げる南方系屋敷林とは、高い生垣が3方以上を囲い、暖地に自生するソテツが屋敷内に植えられ、屋敷背後には丸みのある広葉樹と推察される樹木に加え、マツが配されているもののことを指している。しかし、これらは銅版画分析から共通性を見だし、南方系なる屋敷林の存在を指定したに過ぎず、現地調査による確認作業が必要となる。これを基に銅版画と現状の比較分析を行うことにより樹木構成パターンの実態を把握し、その上で南方系の原型について復元的に考察してゆく。これは同時に、屋敷林の変容過程を解明する作業になる。

この南方系については、これまでその全体を屋敷林とみなし検討しているものはあまりみられない。ただし、屋敷林を構成する各パターンを個別に分析したものはみられ、なかでも最も多くの研究蓄積が見られるのは、生垣についてである^{注2)}。これは生垣が『万葉集』の時代から歌に詠まれるなど史料に度々登場することにより歴史的

に評価されていることや^{注3)}、今日における町並み景観への配慮、環境負荷低減などの観点から生垣が実用的にも評価されてきたことにある^{注4)}。防風機能を取り上げた研究も多数あり、とくに台風の影響を受けやすい地域での研究は、屋敷を囲う発達した生垣が見られることから南方系屋敷林の典型的な事例を扱っているものと考えられる^{注5)}。また、温暖な地域に自生する樹木については、これまでに九州沖縄地方や静岡・千葉などの太平洋沿岸地域を対象にした研究がみられ、気候との関係に着目した植生学的視点から、各樹木の植生分布が明らかにされている^{注6)}。これらを概観すると南方系の屋敷林を検討する際に有用な先行研究が既に蓄積されているといえよう。しかし、ここで示される知見のほとんどは個別要素の検討に重点を置いているため、屋敷内にほかにどのような要素がどのような位置関係で存在するのかといった屋敷地レベルでの把握は進んでいない。

そこで筆者らは、屋敷林を「屋敷及びその周辺において、特定の機能を担うべく植えられた樹木群を意味する」と広義に再定義し^{注7)}、分析を進めてきた。屋敷内には多くの樹木が植えられており、それらの樹木全てを屋敷林の要素と捉えることもできるが、これらのうち複数の屋敷で確認される定型的な配置・形態^{注8)}をもつものを樹木構成パターンと定義し、抽出を行った。なお、ここでいう屋敷林の原型とは、江戸時代を通じて一定の発達・成熟をみた後の屋敷林の構成を意味しており、その様子が明治20年代に発行された一連の銅版画に記録されていたのではないかと考えている。

では次に、分析対象とする地域の特性と南方系屋敷林の特徴について、整理しておくこととしよう。

* 筑波大学大学院システム情報工学研究科
大学院生・修士(環境科学)

** 筑波大学大学院システム情報工学研究科 教授・博士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Systems & Information Eng., University of Tsukuba,
M. Environmental Sciences
Prof., Graduate School of Systems & Information Eng., University of Tsukuba, Dr. Eng.

2. 南方系屋敷林地帯の諸特徴

2.1 銅版面にみえる南方系屋敷林の特徴と対象地の選定理由(表1)

銅版面分析から判断されることとして、敷地を囲う発達した C. 生垣が植えられていることに加え、温暖な地方に自生する H. ソテツも屋敷内にみられることがまず注目すべき点である。一方、D. 面状樹木の出現が極端に少ないことや A・B・E-G のパターンが関東の平均と大差ないことも指摘できる。これは、関東全体の銅版面分析との比較から解るのだが、千葉・神奈川の両県にその傾向が現れ、とくに房総半島南東部と三浦半島に位置する屋敷では、その特徴が顕著にみられるのである(表1)。これらの結果に加え銅版面を子細に分析してみたところ、生垣は背の高いものが多く見られ、2 方及び 3 方以上を囲う形態のものであった。A. 屋敷背後林は、広葉樹と見られる樹木の出現が卓越していた。また、マツであろうと推察される樹木が広葉樹とみられる樹木の合間に度々登場することも考慮しておく必要があろう。

このような南方系屋敷林の特徴をよく現すものは、上述の通り、房総半島南東部と三浦半島に集中するのだが、より多くの銅版面が残されており十分な分析対象が確保できるという理由から千葉県の実隅川流域を現地調査の対象として選定した。

当地域は、図1に示すように房総半島南東部に位置し、調査対象屋敷は現市町村域では大多喜町といすみ市(夷隅地区、岬地区)に属している^{注9)}。夷隅川は、大多喜町といすみ市にかけその流域を形成し太平洋に注ぐ河川である。流域に広がる平野部には、古来稲作を生業としてきた農村が点在し^{注10)}、平野部に隣接して丘陵地があり、その縁にも集落が存在する。

次に、銅版面とそこに描かれる屋敷の特徴について触れておこう。

2.2 対象屋敷の特徴と史料の性格

当地域の屋敷が描かれる銅版面は、『日本博覧図』千葉県之部後篇(青山豊太郎編、全192図、明治29年[1896])^{注11)}に所収されており、そのうちの農村部に立地する28軒を対象に現地調査を行った^{注12)}。

銅版面は、その精緻な筆致から細かな描写が可能であり^{注13)}、絵画であるという特性を活かし俯瞰的に屋敷を捉えているため、屋敷内の多くの要素を描き出している。反面、絵画であるがゆえに依頼主の意図や作り手の作為を込めることができるので、銅版面に描かれるものの信憑性には注意を払う必要がある。したがって、現地での確認作業を要するのである。また銅版面は、一枚に一屋敷が描か

れることが基本である。このため、屋敷の立地や周辺住居との距離までは解読できないし、樹木は、樹形の特徴や樹高の違いはみえるものの、樹種の特定まではできない。それに加えて、現状は大きく改変されている可能性もあるため、毎木調査・ヒアリングなどの現状調査を行う必要がある^{注14)}。毎木調査では、一軒ごとに配置図を作成の上、樹木をプロットし、A-Hの8パターンを抽出した。また、この作業により主要構成樹種の傾向も把握できた(図2)。用途や配置意図については、銅版面の状況と比較しつつ聞き取りにより補填した。現状調査から、屋敷が属している集落の類型をみると散居は4軒、塊村集落は18軒、街村(列村)集落は6軒であった。また、銅版面と現状の敷地形状及び土地利用ともに一致するものは23軒であり、敷地形状に変化はないものの、土地利用が住宅地や集会施設または未利用地に变化していたものは5軒である。

このように、屋敷の置かれる環境は数種類に分類することができ、以下屋敷林の樹木構成パターンの現状を理解する際にもこれらの環境を考慮する必要がある。これらの屋敷の規模は、図3に示すように比較的大規模なものであり^{注15)}、銅版面が裕福な階層の屋敷を描いていることを示している。

3. 南方系屋敷林の復元的考察

ここでは、銅版面の分析により南方系とした屋敷林が、そもそも実在していたのか、また実在していたとするなら樹種や用途などが如何なるものであったのかを現状調査から復元的に考察する。比較的樹木構成パターンがよく残されている屋敷を例に挙げ、まず南方系を構成する主要なパターンについて、銅版面分析と現状の対照表(表2)とも対応させつつ論じてゆく。

3.1 南方系屋敷林を構成する主要なパターン

生垣 まず南方系屋敷林を最も明確に特徴づけるのは、敷地を囲う発達した生垣である。表2からも解るように全ての屋敷の銅版面に描かれ、残存率(=出現率)は86%(28軒中24軒)と樹木構成パターンの中で最も高い割合を示している。樹種は、どの屋敷でもマキを用いており^{注16)}、「マキベイ」と呼ばれるマキの単植生垣であることも判明した^{注17)}。

ではここで、どのような生垣が現存しているのかを具体例を取り上げみてゆこう。図4・5に示したNo.25の場合は、銅版面には敷地北及び西側に高い生垣が描かれ、これが現存しマキベイと呼ばれ

表1 樹木構成パターンの出現頻度

地域別 銅版面数	房総半島 南東部 128	三浦半島 16	千葉 358	神奈川 70	関東 831
単位 構成	% (実数)	% (実数)	% (実数)	% (実数)	% (実数)
A 屋敷 背後林	61 (78)	38 (6)	59 (211)	54 (38)	57 (470)
B 大木 と祠	36 (46)	31 (5)	35 (127)	27 (19)	38 (315)
C 生垣	72 (92)	44 (7)	65 (235)	46 (33)	48 (397)
D 面状 樹木	8 (10)	19 (3)	16 (58)	23 (16)	22 (186)
E 鑑賞 樹群	77 (99)	63 (10)	75 (269)	66 (46)	76 (628)
F 屋敷 畑	23 (29)	6 (1)	15 (53)	20 (14)	20 (164)
G 植栽 樹	9 (12)	13 (2)	12 (42)	7 (5)	11 (93)
H ソテツ	30 (38)	38 (6)	18 (65)	19 (13)	10 (87)
その他	9 (12)	13 (2)	2 (8)	4 (3)	3 (21)

・濃い網掛けは、関東の平均を10Pt以上上回るものを示し、薄い網掛けは、5Pt以上上回るものを示している。
・注1の文献に示した銅版面を分析した結果である^{注1)}。

図1 調査対象屋敷の関東地方における位置と地区内での分布

・○内の数字は銅版面目録番号によるものである。位置図の●は、銅版面に描かれた屋敷の位置を示しており、濃い網掛けは対象の市域であり、薄い網掛けは植生分布を示している。なお、植生分布は磯谷(1994)によるものである^{注6)}。

ている。この屋敷での聞き取りによると「マキベいは家の繁栄を象徴するもの」であり、銅版画は同家の最盛期の様子を記したもののことであった。建物自体は建材として売払ったが、マキベいは残し今にその面影を伝えている。マキベいは、道路や田畑に接する見晴らしの良い場所に配置され、高さが2m以上で厚みのある生垣であり屋敷の象徴となるが、隣家との境にある生垣は、1.5m未満の低いものであり「(ただの) イケガキ」と呼ばれ、同じマキの生垣でも明確に区別されている。一方、No.6の南側の敷地境には銅版画にも描かれる樹高の高い生垣が現存しており、現在では、高さ1.8~2mのものを約140m連続するように仕立てている(図6、7)。所有者によると、一部移植したものもあるが、門から続く敷地を囲う南側の生垣は、100年以上前から変えていないとのことである。

この二事例のように敷地の3方以上を囲う生垣はとくに発達しているものであるが、当地域ではこの二つ以外にも6軒でみられた(2方を囲うものは7軒)。これは、No.6の場合は集落縁辺部に立地し、No.25の場合には散居に近い集落立地であって、3方で田畑や道に接していることから敷地を囲う生垣が発達したものと推察される。ただし、銅版画では3方以上を囲うように描かれていたものでも、現状では1方のみになっているものもあり(表2)、後続のパターンとともに改変行為に注意する必要がある。

象徴としてのソテツ もうひとつ南方系の代表的な指標として、このソテツを用いたパターンがある^{注18)}。これは、銅版画に描かれる特徴ある樹形から判断したものだが、14軒中9軒(残存率64%)で残存し、現存しない屋敷でもソテツの切株が残されるなどその痕跡を確認できる(2軒)。明治中期以降に新たに設けられたものを含めても28軒中10軒(出現率36%)とその出現頻度は限られるが、銅版画にみられるようなソテツを用いたパターンは確かに存在した。

No.7では、「オクニワ」と呼ばれる座敷庭が残され、その庭内にソテツが現存している(図8、9)。銅版画に描かれるものと同様に株立ちの状態であり、明治期から存在しているものと推察される。このように銅版画に記された状態でそのまま現在も管理されているケースは6軒でみられる(管理放棄されているもの4軒)。また、No.29では祠の傍に大木はないがソテツが存在し、屋敷内のシンボルとみなせる事例である(3軒)。

一方、家主が居住し続けている場合でも消失しているもの、残存していたとしても放置されているものもある。したがって、維持管理されてきている場合と分け、慎重に解釈をしていくべきであろう。

図2 敷地内にみられる高木の出現頻度

3.2 南方系屋敷林の構成樹種(図2)

屋敷背後林 まず、高木を擁する屋敷背後林についてみると、このパターンは銅版画において、円錐形に描かれる針葉樹(スギ、ヒノキなど)と判読ができるものに加え、枝がよく見え丸みをもった樹形で描かれる広葉樹と推察されるものの出現が顕著である(表2)。後者の樹種を現地で照合するとシイノキ、ニッケイ、カシノキ、クスノキなどの常緑広葉樹であることが判明した^{注19)}。これは、樹形の特徴がそのまま銅版画に記録されていたとみなせる事例である。また、この樹種選択の傾向は、図2に示すように各屋敷において確認され、当地域において一般的なものであることを示唆していよう。なお、出現した各樹木は温暖な気候条件下で自生するものであり、南方の特徴を示していると考えられる。

典型例としてNo.7・26を取り上げてみてみよう。No.7(図8、9)では、屋敷背後に丘陵地が迫りその丘上にシイノキ、ニッケイ、ケヤキが大木となって現存している。ヒバやツガも大木に育っており、これらの樹木が林立し屋敷背後林を形成している。この他にも、モウソウチクが屋敷背後の大半を占めており、現在もタケノコを食用としている。一方、シイノキは銅版画には3本描かれ、うち2本は現存するが、もう1本は倒木として放置されている。これは、大木となった樹木の処理が容易ではないことを現していよう。

No.26(図10、11、12)は、銅版画からもわかるように川に背後を限られた敷地である。その屋敷背後のスペースに現存する3本のシイノキは、遅くとも明治前期の段階で大木と呼ぶことのできる程に生育していた樹木であり、現在もケヤキ、スギなどと共に林立して

表2 樹木構成パターン別の銅版画分析結果と現存状況

No.	立地条件等	敷地規模	A 屋敷背後林	B 大木と銅	C 生垣	D 面状樹	E 庭園空間	F 庭敷畑	G 植栽樹	H ソテツ	その他
No.	形・立地	間口×奥行	銅版画・現存	銅版画・現存	銅版画・現存	銅版画・現存	銅版画・現存	銅版画・現存	銅版画・現存	銅版画・現存	銅版画・現存
6	塊・縁・宅	52×53	●×	●○	◆③①○③		◎○◎		★	◎×	
7	列・縁・丘	68×117	●○●○	◆③①○③		◎○◎				◎○	
15	塊・縁・丘	85×59	●○●○	◆②①○①		◎○					松
16	塊・中・丘	29×44	●○	◆②①○①		◎△					松
17	塊・縁・丘	32×62	●○	◆③①○②		◎×	◎○			◎○	松
18	散・縁・丘	38×41	●○	◆②①○①			達★		◎○	松	
19	塊・縁・丘	23×59	●○	◆②①○①		◎×					松
20	列・縁・丘	38×74	●○	◆③①○②		◎×					松
21	塊・中・宅	74×66	●○	◆③①○①		◎		◎×			
22	塊・中・畑	54×71	●○	◆③①○②		◎○	達★				★
25	散・縁・田	44×45	●○	◆③①○③		◎○	達★	◎×			
26	街・中・川	56×109	●○	◆③①○③		◎△	達★		◎×		
27	塊・縁・川	66×50	●○	◆③①○②		◎○	◎○				
28	塊・縁・田	59×54	●×	◆②①○①		◎×			◎×		
29	塊・縁・丘	41×67	○	◆②①○②		◎×	◎○			◎○	松
32	塊・縁・宅	35×51		◆③①○①				◎×	◎○		
33	街・中・田	35×66	○	◆②①○①		◎○					松
34	塊・縁・丘	81×63	●×	◆③①○①		◎△	◎○	★			
35	散・縁・谷	96×38	●○	◆②①○①		◎○				★	
36	散・縁・谷	36×51	○	◆③①○①		◎×	◎○		◎○		
37	塊・中・丘	53×68	●○	◆③①○②		◎×	◎×	◎×	◎×		
38	塊・縁・谷	48×98	★	◆③①○①		◎△			◎×	松○	
39	塊・縁・畑	53×71	★	◆③①○③		◎○	達★	★	◎○		
40	列・縁・丘	41×75	●○	◆③①○②		◎△	◎○				松×
41	塊・縁・畑	83×93	●○	◆③①○③		◎△	◎○				
42	街・中・宅	47×41	●×	◆③①○③		◎○			◎×		
112	街・中・宅	63×61	●○	◆③①○③		◎○		★		◎×	松×
113	塊・縁・田	94×89	●○	◆③①○②		◎○	◎○		◎○		
114	塊・縁・田	94×89	●○	◆③①○②		◎○	◎○		◎○		
パターン記号			A	B	C	D	E	F	G	H	他
残存率			80	56	86	0	77	88	0	64	0
銅版画/現状			25/20	18/10	28/24	2/0	26/20	9/8	4/0	14/9	11/0
出現状況			76	64	86	0	71	46	11	36	0
銅版画/現状			28/22	28/15	28/24	28/0	28/20	28/14	28/3	28/10	28/0

・Noは『日本博覧図』目録によるものであり、他の屋敷情報は現状調査による。
・銅画におけるAの●は広葉樹林、●は混交林、○は針葉樹林。・Bの●は広葉樹、○は針葉樹。・Cの◆は高木、◇は低木、◆◇は両方出現。・D-Hは、◎が出現を表す。
・現状における○は現存、△は変更あり、×はパターン消滅、★は新規出現を表す。
・Cの囲いについては、③が3方以上、②が2方、①が1方のみ敷地を囲う状態を表す。
・表内の文字情報は、銅版画に描かれるものを個別に挙げたものである。

屋敷背後林の主要構成要素となっている。家相図には、銅版画に描かれる樹林帯と同位置に「藪」との記載があるので、銅版画に描かれる以前から何らかの樹林が存在していたことが窺える。これらは、川からの吹き抜ける風から屋敷を防護する目的のほか、丘陵地が近くにないことを考慮すると、用材確保や薪炭採集などの敷地内需要の目的を兼ね備えたものであると推察される。

この二屋敷の例からもわかるように、銅版画に描かれていた屋敷背後林には、背後の丘陵地と一体となるもの（14軒）、川に背後を限られるもの（2軒）など地形的な制約がある場合と、宅地や田畑に背後を限られるという土地利用的な制約がある場合（12軒）の二通りのものが確認された。また現状ではあまりみられないが、銅版画に出現したマツらしき高木（10軒）もその痕跡がみられることに加え、聞き取りによっても過去に存在していたことを認めることができた。

中・小木の樹種 さて、前述の高木以外にはどのような樹木が存在するのだろうか。まず中木では、マキが生垣を構成する以外にも孤立木として存在している。これには大木となっているものではなく、ほとんどが観賞用に仕立てられ、玄関先や鑑賞空間に設けられている。また、ツバキの出現が相次ぐことも注視すべきであろう²⁰⁾。一方、屋敷内に植えられる果樹にはウメ、カキが多く、ユズ、ミカンのような柑橘類も見られる。次に小木では、サツキ、ツツジなどの花木に加えツゲなどが観賞用として仕立てられているほか、アオキ、カクレミノ、ヤツデ、ナンテンなどが大木や建物によって日陰となった場所に出現する（図5、7、9、12）。

このように常緑広葉高木やマキ・ツバキ・柑橘類などの屋敷林の樹種の傾向は、温暖な地域の特徴を表しているようにみえる²¹⁾。

3.3 銅版画に描かれた南方系屋敷林の実例

以上のように主要パターンは、配置・形態とも銅版画に描かれたものと同様のものが現状で確認され、その樹木構成パターンは明治期にも確かに存在していたということができよう。パターンを構成する樹種も判明し、南方の温暖な地域の特徴を反映しているものであること、当地域に一樣に広がる傾向であることがわかった。また、面状樹木が全く見られないことなど（表2）、パターンごとの出現頻度に明確な差が認められ、その状況が銅版画分析の結果と同様のものであるとの解釈も可能である。このように銅版画に描かれた屋敷の現地調査を行うことにより、南方系屋敷林の原型とは「敷地の3方以上を囲う背の高い生垣を設け（夷隅地域の構成樹種はマキである）、時に屋敷内の象徴としてソテツを有し、常緑広葉樹（シイノキ・ニッケイなど）のような暖地に自生する樹木に加え、高木のマツも屋敷背後林として保有しているもの」と樹種などを含め記述し直すことができよう。

さらに、このように銅版画に見られたものと同様の現象が確認されたことは、銅版画の描写が緻密であり、屋敷林のような付属物でさえかなり正確に描いていたことの証左ともなる。もちろん現在に至るまでに変化を遂げたものもみられ、ついでこの点を検討したい。

4. 樹木構成パターンの変容実態

以下では、屋敷林の原型がどのような変容を遂げたのかについて、出来る限り具体例を示しながら実態に迫ってゆくこととしよう。

4.1 屋敷内での改変行為の実例

まず、幾つかのパターンの維持・改変状況を同時に観察すること

図3 対象屋敷敷地規模

図4 No.25 邸銅版画

図5 No.25 邸配置図

図6 No.6 邸銅版画

図7 No.6 邸配置図

のできる No.26 を取り上げてみよう(図 10-12)。当屋敷では、先述の通り屋敷背後に大木が現存し、維持されてきたことが判明している。また、二枚の家相図及び銅版画には同位置に「祠」が示され、これも現存する。その傍にはシイノキが現存し、大木と祠のパターンを構成している。敷地の周囲に目を配ると、生垣(マキベイ)が明治期と同様に維持されていることも判る。一方、その生垣の外側にはかつて「桑園」と書かれた畑があったが、スギ林に改変されている。次に、建物周辺をみてみよう。4 時点の状況を見比べると屋敷内の建築物は、ハナレを除き全てが現存していることが分かる。現在のハナレは、明治 29 年以降に建てられたもので、大正 4 年の家相図に描かれるものと一致する。そして、このハナレに付随する鑑賞空間に改変がみられる。オモヤの座敷付近に明治 13 年の家相図には「庭」とあり銅版画には囲い装置を設けた鑑賞空間が描かれている。しかし、この家相図には、「庭忌山水」との記載があり、その場(「庭」)に「山水」があることは不適切であると判断されたようである。そのため庭内にあるソテツなどは保持していく対象にはならず、大正期のハナレ建設の際に取り除かれている。この他にも付属屋は銅版画に描かれるもので 8 棟、現在も 9 棟と多いのだが、面状樹木はどこにも見当たらない。また植栽柵も銅版画、現状ともみられない。

こうしてみると屋敷林は、同一屋敷において一様に維持・改変が行われるわけではないことがわかる。敷地内の利用状況に応じてパターンごとに変化が見られるのであり、存続が優先されるものとそうでないものが存在することが判明する。これらを考慮したうえで、敷地利用を念頭に置きつつ屋敷内の空間別に検討を加えてゆく。

図 8 No.7 邸銅版画

図 9 No.7 邸配置図

4.2 敷地内利用に対応した樹木構成パターンの変容実態

(1) 主屋及び屋敷背後のスペース(図 13-1)

屋敷背後林 先にも述べたように、屋敷背後に林立する樹木については、毎木調査によって樹種を特定し、屋敷背後林の置かれる環境には大きく二通りあることも確認した。ここでは、その二通りのその後の状況についてみてみよう。まず、屋敷背後を土地利用的な制約により限られたものである。No.6 では、屋敷背後に大木が林立している様子が描かれ樹種はケヤキだったと判明した。しかし、屋敷背後に別の屋敷が隣接し、その空間が限定されているため、隣家への落ち葉の影響などを考慮し 3 年前にこのケヤキを伐採している。現在では切り株のみ残され、銅版画に描かれる状況からは一変して

図 10 No.26 邸家相図(左:明治 13 年[1880]、右:大正 4 年[1915])
・()内は、筆者らが補足

図 11 No.26 邸銅版画(明治 29 年[1896])

図 12 No.26 邸配置図

いる（図 6、7）。この改変は、集住密度が高い集落の屋敷において、その背後に別の屋敷が存在したことが影響したとの解釈が可能である（図 13：Ⅰ－②、類似例 No.112）。次に、地形的な制約があるものについてだが、No.26 のようにその地形や立地条件が理由で残存する場合がある。では、当地域で最も多い丘陵地と屋敷背後林が一体となるものはどうだろう。例えば No.37 では、敷地形状は基本的に変わらないが、分譲住宅が 8 棟建っておりかつての屋敷の面影は皆無である。しかし、屋敷背後林の様子は銅版画のものとあまり変わらず（図 13：Ⅰ－③）、敷地が売却され土地利用が変化しても残されるものもあることが確認でき、宅地化＝都市化が進行しても全てが一緒に消失するわけではないことを示している（類似例 No.18・19・28）。

屋敷背後林が新規に出現する場合もある。これには屋敷畑であったスペースに用材を得るためスギが植えられた場合と（No.26）と築山として利用されていたスペースが管理放棄され実生の樹木が繁茂して来た場合（No.38）の二つのケースがあった。これらは一見屋敷背後林が充実したようにも見えるが、明治期の段階では多様であった敷地内のパターンが単一化する方向へ移行したとも考えられよう。

屋敷背後林の変容には、人為的な影響のほかにも重大な変化をもたらす要因がある。たとえば、当地域には銅版画において広葉樹のほかにマツが描かれることを指摘したが、現状ではほとんど見られないのである。これは、昭和 49・50 年にマツクイムシが当地域を席卷し全てのマツを枯らしてしまったことが原因であり^{注 22)}、空いたスペースには、スギやヒノキが植えられている（図 13：Ⅰ－④、⑤）。これが、現在のスギの出現頻度を上げている原因の一つであろう。

また、自然災害だけではなく社会情勢も大きなインパクトを与える場合がある。屋敷背後に限らないが、敷地内に材木として売りに出せるスギを植林する事例がみられるのである。そのスギが高度経済成長期以降の外材流入により売れなくなったため、スギ林が放置され現在に至ったものもある。そのスギが衰弱し、竹林化する場合もみられる（図 13：Ⅰ－⑥、No.15、26、40）^{注 23)}。

大木と祠 銅版画に描かれる祠のほとんどは屋敷神で、当地域では稲荷（「オイナリサン」）を祀るものであり、主屋の背後に設置されている^{注 24)}。これは、対象屋敷が古来稲作により生計を立てていたことを伝えている。樹木の植えられた時期との前後関係については、すでに大きく生育した樹木の傍に祠を設置する場合と祠を設置したのちに樹木を植える場合の二通りのケースがみられる。前者の場合は、主にシイノキが選ばれており（5 軒）、古来大木として屋敷内に存在していたことが聞き取りにより確認できる。実際に、No.26 では、高さ 20m、目通り幹周 3m、樹冠の直径 18m を超える大木が祠のそばに存在する。これについては、祠の位置や樹木の位置が全く変化していないことが現在を含め 4 時点で確認ができる。また、No.33 では、屋敷内の改変行為が頻繁で生垣さえ改変が行われたのだが、大木になったニッケイとその傍にある祠はそのまま残存しており、屋敷内で優先的に維持されたことを表している。後者の場合は、ユズリハが植樹された例がみられた（3 軒）。この樹木は、シイノキほどの大木にはならないが、若葉が伸びてから古い葉が落ちるので、子孫が絶えず続くことを祈願し庭木として用いられることがある^{注 25)}。当地域でも同様の伝承の存在が聞き取りにより明らかとなり、大木になってはいないが稲荷の横に植えられていることを確認できる。この他にニッケイ（2 軒）、スギ（2 軒）が見られる^{注 26)}。

（2）敷地周囲のスペース（図 13－Ⅱ）

生垣 次に敷地周囲についてだが、先にも述べたように生垣がよく残されていることが当地区の特徴といえる。ただし、この生垣にも配置場所によりその残り方に違いがみられる。主に集落境や道路との境としての役割を持つ「マキベイ」はその存続を優先されるが、隣家との境の役割を担わされていたものは、接道条件などの変化に応じて消失していく場合がある。No.16 では、隣家との境にある「（ただの）カキ」と呼ばれる生垣が現在は管理されず孤立木が数本列状に並んでいる状態であった。No.22 では、生垣であったものが孤立し、観賞用に仕立て直されている（図 13：Ⅱ－①）。さらに、マキの切株のみ残し、ブロック塀に変更されている場合さえある（図 13：Ⅱ－①'、No.33）。畑を囲うだけの生垣や敷地境界を示すだけの「イケガキ」「カキ」とよばれるものは、樹種がマキであったとしても接道条件や土地利用条件が変化する度に放棄されやすいといえよう。

もっとも維持と改変だけが行われるわけではない、No.7 では、線路が建設される際に敷地が図 9 右下部分のように斜めに變形し、その場所に生垣を移植している（図 13：Ⅱ－③）。No.6 のようにケヤキの大木群が失われ空いたスペースに遮蔽のために新たにマキの生垣を設けることもある（図 13：Ⅱ－④）。これらに加え、災害により失われたものが更新される場合がある（図 13：Ⅱ－②）。No.40 では昭和 5 年 1 月に火事があり主屋が炎上した。その際に座敷庭や庭に隣接するマキの生垣も燃えたが、火災後同じように生垣に仕立て直されており、一見焼失したことはわからない。もちろん幹回りを見れば焼け残った樹木と新たに植えたものでは幹の太さが違うので植え替えたことは明白である。生垣は、古いものが残されるだけでなく中には更新され続けるものもあって、現在においても特徴ある景観を維持しているということができよう。

屋敷畑 表 2 を見ると、銅版画に屋敷畑が描かれていたもの（9 軒）に対し、現存するものは 14 軒であり、新たに設けられたと推測されるもの（6 軒）が目立つ。樹種や配置の特徴についてみると、植えられるものは、食用としてのカキ（10 軒）やウメ（8 軒）が多くクリ（5 軒）も存在する。ミカンやユズといった柑橘類が確認されることも特筆すべきことだろう（5 軒）。設置場所としては、当地域では屋敷畑が、マキベイとよばれる囲いの外に設けられることもあり（6 軒）、さらにその外側に敷地境界を示すための生垣を設ける場合もある。No.7 の場合は、屋敷畑を囲う生垣にチャノキを用いており、戦前までは自家用の茶を収穫していたという。現在では茶摘みは行われていないが、砂埃を防ぐためそのまま置かれている。また、屋敷畑が新たに設けられる場合もあった。例えば No.22 では、使用頻度の少なくなった接客用の建物を壊し、その跡に畑を設けている。カキ、ウメなどの果樹が植えられているほか、自生しているフキを食用としている（類似例 No.18）。また、No.25 では養蚕場であった作業小屋跡に自家用の畑を設けている（類似例 No.39）。このように建物跡を有効活用しようとする行為が、屋敷林を構成するパターンを増やすことにつながる場合もある（図 13：Ⅲ－①）。

（3）建物周りのスペース（図 13－Ⅲ）

鑑賞空間 敷地内部をみると当地域でも例外なく鑑賞空間が設けられている（19 軒）。銅版画では、座敷と推察される部屋に接して設けられることが多く、門を設け囲い装置を設置している場合もある（9 軒）。No.7 では、このような座敷付近の鑑賞空間を「オクニワ」

とよび現在も手入れしている。このようにオクニワとよぶ事例は、当地域ではこのほかにも3軒で確認できる。この中には、マツやカエデ、モミジなどの鑑賞用に仕立てられた樹木のほか、玉刈りされたサツキ、ツツジなどの花木が配される。とくに当地域では、鑑賞用に仕立てられた玉作りのマキと円筒形のツバキが多くみられる。この他にも先述の通り、庭内にソテツを設ける場合もある(3軒)。

主屋やハナレなどの居宅周りでは、座敷庭の改変が顕著に見られる。その一つは管理に手間のかかる鑑賞空間を放棄したことである。座敷庭は、本来座敷で接待する際にそこから眺めるためのものであり、接客行為の頻度が低くなった場合にその必要性も低下することは言をまたない²⁷⁾。これは、銅版画に描かれる人の出入りの様子から現在との比較が可能であろう。多くの銅版画には、人力車に乗った人が屋敷に集う様子が描かれ、座敷に人を上げ接客する様子さえみえる。接客行為の必要性が薄れて座敷が閉ざされ、座敷からの眺めを維持する必要がなくなった現在とは大きくその様子が異なる。また一方で、玄関先や門付近など表の空間では、剪定し整えられた樹木が新たに配されている。明治期の段階では、作業用として広く確保されていた空間が現在では観賞空間として利用されているのである(図13:Ⅲ-②)。

象徴としてのソテツ ソテツは、先述の通り祠の傍や玄関先、もしくは座敷庭の築山の上に設けられ、屋敷のシンボルとなっているものがみられる。また、残存度も高く一見すると継承性が強いパターンであるとみることもできよう。しかし、残存しているもののうち4軒は、敷地が未利用で放置されているものであり、No.6では、ソテツについて不吉な言い伝えがあるとのことから伐採を決めているし、No.26でも先述の通り存続されなかった。これらのことから生垣のように継承の優先度が高いパターンであるとはいいい難い。

面状樹木・植栽棚 この二つは、銅版画の出現数も少なかったが、現状においてもみられず当地域では定着しなかったといってよいだろう。面状樹木は銅版画では2軒でみられたが²⁸⁾、現在ではいずれも面状に剪定されていない。樹木(モチノキ)自体は残されるが管理放棄により形状が失われたものとみられる。植栽棚は、銅版画に描かれたもの(4軒)は失われ、別に新設されたものののみであった。

4.3 継承と改変の傾向にみる南方系屋敷林の特質

これまで「銅版画」に描かれた情報と現状調査から得られた情報を比較検討し、南方系屋敷林について変容実態を検討してきた。これにより屋敷林の継承・維持、改変、更新、消失、出現、増加、減少などの実態を把握することができたように思う。以下ではそれらの傾向をまとめ、その原型と現在の状態を改めて抽出しておこう。

(1) **屋敷背後** 常緑広葉樹とマツがスペースの大半を占め、シイノキの大木と稲荷がセットとなって配されているものが原型であろう。これらは、災害等により失われるものがある一方で、自然の作用により実生の樹木が繁茂しシイノキ、ニッケイなどによる屋敷背後林が充実する傾向が見られた。また、社会情勢を反映して鑑賞空間が放棄され、そこに常緑広葉樹が繁茂し屋敷背後林を形成している場合や用材を得るため人為的にスギが植ええられる場合もあった。

この改変を受けた状況がほぼ現在の形に表れているといつてよい。ただし、屋敷背後では、改変が一時的に行われたとしても、更新・出現も同時に繰り返されており、現在の形になるまでには、長い時間的スケールの中で変容してきたのだと解することができる。

(2) **敷地周囲** 当地域の屋敷林を強く特徴付けるものは、敷地周囲に発達した生垣であろう。これが依然として現存しており樹種にはマキが用いられ、当地域では一様に「マキベイ」と呼ばれている。

このパターンは、原型が維持されるだけではなく、更新されかつ新規に設けられるなどその用途、形態が継承されていることが判明した。当地域では、この囲いの外に屋敷畑が設けられることもあり、さらにその外側に生垣が配されるケースもある。

(3) **建物周り** 座敷付近に観賞空間(オクニワ)を設け、接客行為を行う際の眺めを用意し、そこにソテツを設ける一方で、敷地内に広く開いたスペースを作業空間として確保し、そこに敷地内需要のための畑を設けるような樹木配置が原型であるといえよう。現状は、明治期の状況と大きく異なるものではないが、オクニワが廃れる反面、鑑賞用樹木が従来の作業空間にも植えられ、配置場所が増加する傾向にあり、屋敷畑のように付属屋の消滅に伴って新たに配されるものもある。一方、面状樹木や植栽棚のように明治期から現在に至るまで全く定着しないパターンが存在することも明らかとなった。

図13 敷地利用別の樹木構成パターンの変遷

5. おわりに

屋敷林は、一般的に理解されるように近現代へと時代が下るにつれ減少傾向にあるばかりではなく、充実する方向に向かうパターンや、一見充実しているようにみえながらもパターンの構成樹種が単一化することもあるなど、パターンにより様々な実態を示していることが判明した。これは、屋敷林が自然物を用いて人為的に形成されてきたものであり、その配置目的自体も多様であることと対応している。もっとも当地域では、南方系屋敷林の主要パターンが基本的には現在でも健在であり、江戸時代を通じて成熟を遂げた屋敷林の原型が継承されていると判断できるのではないかと考えている。

ただし、本稿では、銅版画に描かれた屋敷のような裕福で大規模な家のみ取り扱っている、そのため狭小な家にどのようなパターンが見られるのかについては検討していない。今後は集落単位での把握が必要であろうし、敷地形状が農村部とは異なると予想される旧町人地の考察も検討課題である。

謝辞

本研究の主史料である銅版画収集において、千葉県立中央博物館の方には大変お世話になった。また、現地調査においては、各屋敷の居住者の方々に大変お世話になった。記して感謝の意を表する。

注

- 1) 不破正仁・藤川昌樹「明治期の関東地方における屋敷林の樹木構成パターンとその分布 銅版画分析をもとにして」(『日本建築学会計画系論文集』74(638)、pp.855-862、2009.4)。なお、屋敷林に関する過去の研究全般については、同論文の「はじめに」でその成果をまとめている。
- 2) たとえば、岡崎文彬編『図解生垣・垣根のすべて』(誠文堂新光社、1975)のように各地の事例を取り上げ、その特徴をまとめているものや実用書に近い吉村明夫『垣根と生垣』(立風書房、1977)があり、この中では、九十九里地方の生垣にイヌマキがよく用いられることが紹介されている。また、額田巖『垣根』(法政大学出版局、1984)のように絵図を用いて生垣の系譜を論じると共に、現存する垣の特性を多角的に評価しているものもある。
- 3) たとえば、額田巖は前掲『垣根』の中で、『万葉集』『枕草子』に生垣が登場することを挙げその系譜を辿っているし、飛田範夫は「日本の生垣の歴史の変遷について」(『ランドスケープ研究』62(5)、pp. 413-416、1999)の中で、中・近世の絵図を用い武家屋敷などの敷地境に描かれる生垣を取り上げて検討し、生垣が日本の伝統的造園手法であることを指摘している。
- 4) 造園分野において、中村隆治・藤井英二郎「生垣とブロック塀をみたときの脳波特性の比較」(『造園雑誌』55(5)、pp.139-144、1992)や近江慶光ら「茨城県取手市における生垣等の困障実態に関する研究」(『造園雑誌』55(5)、pp.361-366、1992)のように保全を目的とし生垣を評価したものがみられる。また、橋本剛ら「伝統集落・民家における生垣の形態と配置に関する実態調査～茨城県南地域における気候景観の事例～」(『日本建築学会関東支部研究報告集』pp.125-128、2006)は、生垣の形態に着目し敷地内配置とその樹種の傾向を明らかにしている。
- 5) 古川修文らの一連の研究「沖縄民家の屋敷林の形態と防風効果－屋敷林の居住環境に関する科学的評価法の研究その1－」(『日本建築学会計画系論文集』494、pp. 105-112、1997.4)は、フクギの生垣を有する屋敷の空間構成をまとめ、風向、風速の詳細なデータを用いフクギの防風性能を明らかにしている。最近では、安藤徹哉・小野啓子が「沖縄中北部集落における屋敷林の変化に関する研究－三時点(1945、1972-74、2003)の空中写真の比較と聞き取りを通して－」(『日本建築学会計画系論文集』73(630)、pp. 1723-1728、2008.8)のなかでフクギ屋敷林の緑量の変遷を分析している。
- 6) 磯谷達宏「伊豆半島南部の小流域における常緑および夏緑広葉二次林の分布とその成立要因」(『生態環境研究』1、pp.15-31、1994)があり、とくに房総半島を対象とした研究では、同じく磯谷が「南房総地域における常緑および夏緑広葉二次林の分布とその成立要因」(『東北地理』41(4)、pp.225-242、1989)のように植生が混在する地域であることを報告している。
- 7) そのため、屋敷の防護を目的とした樹林(防風林・遮蔽のための生垣など)

のほか、鑑賞目的のものや果実採集目的のものも包含するものとする。

- 8) 屋敷配置及び建物との関係性も含むものである。
- 9) No.39は、陸沢町大上が隣接する地区であり流域とみなし分析した。
- 10) 夷隅町史編さん委員会編『人々の生業とくらし』(『夷隅町史』通史編、2006)。
- 11) 本稿で扱った『日本博覧図』(千葉県之部後編)は、千葉県立中央博物館に所蔵され、屋敷調査の際には個人蔵の同史料の存在を確認できた場合もあった。また、原版である銅板の存在を確認することができたものもある。
- 12) このほかにも当地域には、町人地に属する屋敷が9軒あり(②-⑤、⑧-⑭)、これらの屋敷では、敷地形状に改変がない場合でも敷地分割されるなどの変化が顕著にみられ、屋敷林もそのほとんどが放棄されている。例外的に残されるパターンもあるのだがこの詳細については他地域の事例も含め別稿に譲ることとし、本稿では農村部に立地する28軒に限定して論じてゆく。
- 13) 前掲拙稿「明治期の関東地方における屋敷林の樹木構成パターンとその分布 銅版画分析をもとにして」の中で銅版画の史料性について、当時の編者による解説や銅版画を用い分析を行った先行研究を挙げ、まとめている。
- 14) 現地調査を行うには、まず銅版画に描かれる屋敷を特定する必要がある。銅版画には、家主の氏名や住所などが記載されるが、住所は番地までの表記が行われておらず現状ではわかりには判別できない。それは、記される情報が明治20年代のもので、名前などが現在でもそのまま使われていることはほとんどないからである。また、同じ苗字を名乗る家が多い旧村域では、苗字のみから判断するのにも限界がある。そこで、銅版画に描かれた建物の配置や特徴を手掛りに集落内で聞き取りをし、屋敷の特定を行った。
- 15) 楠本侑司「集落空間の整備手法」(日本建築学会編『図説集落』pp.325-342、1989)の提示する敷地規模から算出すると、約1320㎡/戸が平均となる。
- 16) マキとは、一般的にイヌマキやラカンマキを総称する名称であり、厳密には植物名ではない。ラカンマキは中国原産でイヌマキの園芸用品種との理解が一般的である。対象地域の生垣には、ほぼイヌマキが用いられていると考えてよいが、本稿では、マキという呼び名で統一して論じてゆく。
- 17) 房総半島南東部において、マキを用いた生垣が多く出現することは、柳井重人ら「千葉県大原町におけるツバキを中心とした生垣の分布実態に関する研究」(『造園雑誌』56(5)、pp.277-282、1993)の中で大原町を事例に明らかにされており、農村部では約80%の出現率であるという。また、戸田義宏「地方のユニークな生垣」(前掲『図解生垣・垣根のすべて』pp.141-144、1977)や額田「植生と生垣」(前掲『垣根』pp.129-146、1984)などによって「マキベイ」と呼ばれる生垣が存在していることも明らかにされている。
- 18) 天野鉄生が『琉球列島有用樹木誌』の中で座間味村の伝承をもとに南中国原産であることを明らかにしているように植生的な特徴から指標となる。
- 19) ただし、図2にも示すように当地域では落葉広葉樹の出現も確認できる。
- 20) 前掲柳井重人ら「千葉県大原町におけるツバキを中心とした生垣の分布実態に関する研究」の中で房総半島南東部の農村部においてツバキの出現が多いことが指摘されている。
- 21) 林弥栄編『日本の樹木』(山と溪谷社、1985)。
- 22) これは、No7、15、40での聞き取りにより判明したが、松原功「千葉県におけるマツノザイセンチュウの分布域の拡大について」(『千葉県林業試験場研究報告』第9号、千葉県農林総合研究センター森林研究所、1974)や『千葉県林業のあゆみ』(千葉県農林部林務課、1979)によっても報告されている。
- 23) これは、農林分野でも特に林業経済学において山本真嗣「森林組合の政治的機能研究に関する一考察」(『林業経済研究』51(3)、pp.38-45、2005)や戴玉才「高度経済成長期における日本、中国の木材消費構造に関する比較研究」(『林業経済研究』45(1)、pp.57-62、1999)などが再三指摘している。
- 24) 主に主屋背後の敷地の北西側に設けられている。これは、嶋田尚「屋敷神」(『関東地方の住まい習俗』pp.174-189、明玄書房、1984)など民俗学の成果の中でも時折触れられ、最近では中田理恵ら「滋賀県湖西地域の里山における孤立木および孤立小規模樹林地の景観パターン」(『ランドスケープ研究』67(5)、pp.665-668、2004)が、景観パターンの一つとして挙げている。
- 25) 前掲林弥栄編『日本の樹木』(『トウダイグサ科』pp.386-387、山と溪谷社、1985)は、樹木の生育上の特徴を挙げ縁起木として取り上げている。
- 26) 出現数が一致しないのは、ユズリハと大木が同時に出現したからである。
- 27) 各地で行われている民家調査の中では、部屋の使用などが民俗学的視点で報告されることがあるが、そのうちのひとつ『つくばの民家一つくば市古民家調査報告書』(つくば市教育委員会、2002)の中では、接客行為が減り座敷の使用頻度も減少していることが指摘されている。
- 28) 山本勝巳ら「自然への配慮」(『関東地方の民家』、明玄書房、pp.439-456、1971)は、この面状樹木が北関東に多く見られるとしている。また、筆者らの筑波地域の調査では、モチノキを用いたものが度々確認された。

(2009年7月10日原稿受理、2010年1月12日採用決定)